

【当会講座履修者で 2023 年 1 級実技試験合格者の傾向】

当会の講座で学んだことと試験の場で実践した 7 つのポイント

当会の講座を受講され、2023 年の第 13 回検定試験で合格された方の傾向です。

当会所属の中の 18 名がアドバイスをしています。

①	事例相談者の話を「傾聴」するとともに、「問題把握」と「具体的展開」を意識した対応ができています。
＝「相談者へのより良い支援と、事例相談者のキャリアコンサルタントとしての成長」という事例指導の目的を理解して、事例相談者の不安を解消するために事例相談者の話を「傾聴」するとともに、事例相談者への「より良い支援」や「成長」のために、事例相談者の問題を把握し、解決するために方策を実行できていた。	
当会の解説	
★つまり：事例相談者とのロールプレイの中で、自襟相談者が話したいこと（面談で行ったことやうまくいかずに不安に思っていること）を十分に聴いて「受容と共感的理解」を行うカウンセリング力だけでなく、「相談者へのより良い支援と、事例相談者の成長」のために、事例相談者の面談技法上の問題を的確に見立てたうえで、それに気づいてもらうためのアプローチを行い、面談の目標を提案して合意してもらい、方策に展開するというコンサルティング力を試験官にアピールできており、加点に繋げていた。	
1 級指導者からアドバイス	
A	「自分らしい面談」が合格する前提条件です。どんな事例相談者が来ても、受容し信頼して面談を進めます。理論を咀嚼して自分のものにし、事例相談者に受け入れてもらえる表現で、しっかり共有していく力が必要です。「自分らしい面談」をするためには、迷い、考え、試し、手応えを感じながら練習して精度を上げ、それを自信に繋げてください。練習のために費やした時間は「資産」になります。それを活かして「合格」に向けて、「自分らしい」面談を構築していきましょう。
B	傾聴は「相談者の話にあいづちしながら、自分から質問してそれに答えてもらう」と勘違いしている人が多いです。事例相談者は、次回面談がキャンセルになるなどして、困ったり迷ったりしてはいるが、経験が少ないため、何が問題か気づいていない状態にいます。「聞いているけれど、聴いていない」「気づいてもらおうとしているけれど、指導者が教えてしまっている」という 2 点を意識すると、面談は前進します。
②	「1 級事例指導」の意味を正しく把握し、ロールプレイで、スーパービジョンを実施できている。
＝1 級検定の「事例指導」の意味は、相談者の問題を解決したり、ケースの素材となった事例相談者と相談者（A さんや B さん）とのやり取りにおける面談のやり方の問題解決（事例検討）ではないことを正しく理解し、スーパービジョンが実践できていた。	
当会の解説	
★つまり：1 級指導面談（1 級技能検定の面接試験）は、「相談者へのより良い支援と、事例相談者のキャリアコンサルタントとしての成長」を目的として、事例相談者の面談技法上の「クセや偏り（問題）」に気づいてもらい、それを解決するために行われることを理解し、ロールプレイの中で、「一般化（概念化）」を意識して実践することで、自身のスキルを試験官に提示できていた。	
1 級指導者からアドバイス	
C	合格者の面談の傾向は以下の 6 点。 ①目の前の事例相談者としっかり向き合い、「対話」をしている。②事例指導者としての見立てを面接中盤には 1 つに絞っている。③事例相談者の「できている」「やりました」の言葉に惑わされずその確認をとって

	いる。④抵抗にあっても動じず、それに対応できている。⑤面談で捉えた問題に沿った内容で目標を提案し、合意を得たうえで、方策を実施できている。⑥面談に一貫性がある。
D	合格できない人は、自身の面談自体が事例検討になっており、「この場面ではどう言えばいいか良かったのかわからない」「そう聞けばよかったのですね」とその事例でのやり取りのハウツーに気を取られる傾向があります。これに対し、合格者は、1級の「指導」の意味がスーパービジョンであることを理解し、その対応ができているという人です。スーパービジョンの意味を理解し、各ケースで何をすべきかがわかっているならば、どれが来てもすることは同じです。「一般化が難しい」と思っている方は、試験で求められるスーパービジョンの目的あるいはスーパーバイザーの役割と責任を毎回のロープレで確認することで、合格に近づくことができます。
E	多くの受験者がケース指導に終始してしまう傾向にあります。ケースで、事例相談者相談したいことを傾聴した後、いったんはケースを離れて、これからもくり返されるであろう事例相談者の面談技法上の偏りに気づきを促し（すなわち「一般化し」）それを改善する指導ができるようになると合格の可能性が格段に高まります。
F	面接の場で、相談者が曖昧に話す場面では聞き流すのではなく、丁寧に言い換えて確認する（勝手な思い込みで理解した気にならない）と、合格する傾向が高まると感じます。また、基本の型を発展させ、ありのままの自分をキープできる（あくまでも事例相談者が主体であり、指導者は、事例相談者を尊重しながら、見守る形で支援する。事例相談者の面談におけるクセを把握しようとする意識を持って対応する）人は合格していると思います。
G	合格の秘訣は、事例検討とスーパービジョンの違いを整理することです。事例検討は過去のケースでの対応を題材にして検討していきますが、1級の試験は目の前にいる事例相談者の、普段の面談スキルの改善・向上が目的ですから、それを踏まえた対応をしなければなりません。

③	「事例相談者の面談技法上の問題に気づきを促し、それを解決するための面談」ができている。
	=ロープレは、自分の実力（面談スキル）を誇示するための面談や、事前に準備してきた自身のシナリオに当てはめるものではなく、事例相談者とのやり取りの中で臨機応変に対応して把握した「見立て」や「問題」に気づいてもらい、目標として合意を得て、解決するための方策を実施できていた。
	当会の解説
	★つまり：自分のスキルを見せるための面談や、予め用意してきたシナリオに事例相談者を当てはめるための面談ではなく、目の前にいる事例相談者の話を傾聴することで、まさに、事例相談者との人格的相互関係の中で事例相談者が訴えた問題や事例相談者が気付いていない問題が何かを見立てられている。
	★つまり：そのうえで、見立てた問題に気づきを促すための働きかけを行い、気づいてもらって、それを解決するための目標を提案しているが、目標の提案について、事例相談者に合意してもらうためのプロセスを踏んで、その過程を試験官に評価してもらうよう意識して対応できていた。
	★つまり：目標の提案について、事例相談者がどの程度合意してくれたのかを「心証」として把握しておき、口頭試問の回答で試験官に伝える目的を理解して対応できていた。
	1級指導者からアドバイス
H	不合格者は、「理論を問いかけて、正解を導くこと」が指導だと思い込んでいる傾向にあります。例えば、自身の面接を改善しようと指導を受けに来る事例相談者に対し、「理論を勉強しましょう」「理論のテキストと一緒に読んでいきましょう」と言っても、効果はありません。これに対し、合格者は、事例相談者のやったことを聞いて、そこから問題を見つけ、気づくように働きかけています。さらに、口頭試問を活用して、面談の

	<p>中で働きかけたアプローチについて補足して答えることで、加点に繋げています。ロールプレイや口頭試問で、事例相談者や試験官に理論の内容（システマティックアプローチを知っていますか？）を説明することは、合格に向けて、意味はありません。例えば、ロジャースの「受容」「共感」「自己一致」は、問われれば自分の言葉で語る事ができて、状況に応じて日常レベルに咀嚼して事例相談者に対して使うことができるかが重要です。講座で、その場の答えだけを求める人、参加者からのフィードバックを受け入れられない人、自己解釈が絶対に正しいと思って他人のアドバイスを否定する人などは、合格には遠いといえます。</p>
I	<p>事例相談者の話に集中して対応し、丁寧に傾聴できる人は合格に近いと言えます。話の展開に焦るあまり「心ここにあらず」の状態では質問や応答を考えていると、事例相談者や試験官には案外伝わりやすいです。あるいは、傾聴が「上手」に見えるようにテクニク的な対応の感じも、不思議なもので伝わってくるものです。また、相手と共に成長したいという思いを忘れずに、最後までベストを尽くす人は合格すると感じます。ともすると、事例相談者の未熟さに目がいってしまったり、逆に、事例相談者の対応を過度に褒めてしまいがちです。事例相談者の「不安の解消」と「気づきを促す的確な指導・アドバイス」の意味を理解した対応を行って、事例相談者と事例指導者の双方にとって有意義な時間になるように意識する人が合格していると思います。</p>
J	<p>事例相談者の面談技法上の問題は何かを見立てるスキル、問題を是正する方策のバリエーションを持つことで、面談は怖くなくなり、合格に近づきます。</p>

④	<p>1級面接試験プロセスの「基本」を確実にマスターしたうえで、自分の「型」を確立し、試験で実施できている（「守破離」）。</p>
	<p>=面接試験の実施方法に関する「試験実施概要」と、採点項目・基準である「評価区分」を熟読して理解することで、1級指導面談合格の「基本」をマスターし、自分の「型」を確立したうえで、試験のロールプレイで、目の前にいる事例相談者に焦点を当てて、自在かつ臨機応変な対応ができています。</p>
	<p>当会の解説</p>
	<p>★つまり：試験合格の方法論として、当会の講座を受講して、1級面接試験の「試験実施概要」と「評価区分」の意味と内容を的確に把握し、面談のやり方と口頭試問での回答法をマスターするとともに、自分の特性に合わせて、改良・改善し、自分なりのやり方を確立していき、試験場では、目の前にいる事例相談者に集中して、臨機応変なカウンセリングとコンサルティングを実施している。</p>
	<p>1級指導者からアドバイス</p>
K	<p>合格のためには、定型ではなく自分の言葉で事例相談者と対話ができること、ロールプレイの中で受ける質問に対して、きちんと根拠を示しながら話せること、自分の期待する応答でない場合の対応策を持っていることが必要です。</p>
L	<p>本番に備えて、ロールプレイで練習を積みあげておくことが大事ですが、日常の面談でも、キャリアコンサルティングのシステマティックアプローチのプロセスや指導面談の事例相談者の問題把握、目標設定と合意、方策のバリエーションなどを意識した実践を行って、実力を涵養していることでより早期の合格への道です。</p>
M	<p>事例相談者役が抱える問題や訴えに対して、受容と共感的理解による温い眼差し・優しさとロジカルな視点での見立てや方策の両方を持って柔軟に寄り添えるところが、合格のための大切なポイントです。</p>
N	<p>ロールプレイは「型」ではあると理解した上で、自分らしさを失わずに対応ができること、さらに、ひとつひとつの問いかけや進め方に意図があることを理解し、今、これは、何のためにやっているのかを自身が理解し、それを事例相談者へも正確にかつ確実に伝えることができれば、合格が見えてきます。</p>

⑤	技能検定の趣旨を理解し、採点者である試験官にアピールして加点を得ている。
	= 試験官が重視するカウンセリングの知識・スキル、キャリアコンサルティングのプロセス、事例相談者とのやりとりから事例相談者の課題を抽出し、目標設定するプロセス、などについて、試験官に理解してもらうことを意思した面談を実施し、試験官から加点を引き出している。
当会の解説	
★つまり：技能検定の実技試験は、「自身が有する技能を試験官に評価してもらうものである」という趣旨を理解し、面接試験の「評価区分」に記載され、ロールプレイで求められている、カウンセリングのスキル、キャリアコンサルティングのプロセス、問題把握から目標設定と合意、方策の実行という面談の流れを意識して試験官に自分の技能が伝わるよう行動する。	
★つまり：口頭試問も面接試験の重要な一部であることを理解し、自身の面談を振り返るとともに、各設問の趣旨から、評価区分の表現を用いた簡潔な受け答えを行って、口頭試問で確実に加点してもらうことができた。	
1 級指導者からアドバイス	
O	受検者の多くは、何を基準に採点しているかも知らずして、30 分の面談をしている傾向にある。したがって、評価区分を熟読し、内容を理解し実践するための分析ノートを作ることで、合格に近づきます。

⑥	ロールプレイ中や口頭試問での受け答えの際の試験官の対応に一喜一憂せず、冷静に対応できた。
	= ロールプレイを行っている最中に試験官が取る必ずしも適切とは言えない対応や口頭試問の発問や回答の際に見せる感情的な表情や態度に一喜一憂せず、ロールプレイと口頭試問の回答を冷静に行っている。
当会の解説	
★つまり：多くの受検者からロールプレイ実施中と口頭試問の際に試験官の想定外（その質問の意図）が分からず、焦ってしまったという意見が寄せられているが、合格した受検者は、そんな中でもそうした行態度に一喜一憂せず、冷静にロールプレイを行い、口頭試問にも全力で対応することで、合格を勝ち取っている。	
1 級指導者からアドバイス	
P	面接試験の最中にどうしても、試験官の表情や態度が自分の視野に入ることがあります。試験官がなぜ、そのような対応をしたのか気になり、ネガティブな考えが浮かびがちですが、心を落ち着けて、目の前の事例相談者に集中することです。ロールプレイ中の試験官の態度や口頭試問での発言・声のトーンなどに一喜一憂することなく、試験実施概要と評価区分に書かれていることを遵守することで合格できます。
Q	1 級面接試験の試験官は、1 日 8 名の受検者を審査します。実技試験の合格率が 6 % とすると 16 人に 1 人の割合ですから、2 日に 1 名の合格者になります。この合格者は試験官に自身のスキルを確実に伝え、得点してもらい合格ラインを突破しています。

⑦	実施したロールプレイの内容・状況と口頭試問での回答が一致しており、口頭試問で加点を得ている。
	= 口頭試問の応答では、試験の重要な一部であることを理解した回答を行うことで加点に結びつけている。
当会の解説	
★つまり：口頭試問は、面接試験の重要な一部として、評価区分の理解を確認することで受検者の実力を測ろうとするものであるという趣旨を理解し実践していた。	
★つまり：自身が行った指導面談を客観的に振り返り、できたところとできなかったところに関し、評価区分に示された用語を用いて回答するよう日頃から心がけて準備し、試験の場でも対応した。	

★つまり：試験実施概要と評価区分の内容を試験直前まで目を通し、内容を理解したうえで試験に臨んだ。

★つまり：口頭試問（聞いていたのとは違う発問の表現）や質問の順番が違っている場合であっても、質問が評価区分のどれを確認しようとして発せられたのかを考えて、その評価区分で求められている用語で表現するよう努力し、試験官に伝えた。

1 級指導者からアドバイス

R	口頭試問は、自分の面談の振り返りができるか否かを確認する試験です。「できていたこと」と、「できていなかったこと」、自分が行った面談を客観的に振り返る能力があるか否かを問う試験ですから、ロールプレイを練習する時は、必ず口頭試問もセットで練習し、回答に慣れておくと良いです。
---	---